

「男、突っ走る！」

第77回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (23)

『オフィスツリーイン』代表

国枝 佐代子 (58)

市民映画プロデューサー

山中 敦夫 (43)

劇団主宰者

本村 俊晴 (54)

音楽プロデューサー

橋田 悟子 (62)

市民映画プロデューサー

野倉 昇平 (21)

WEB会社社長

藤田 浩司 (29)

『スリジエネ』メンバー

前川 海司 (18)

『スリジエネ』メンバー

山森 茜海 (22)

『スリジエネ』メンバー

富永 美茜 (21)

『スリジエネ』メンバー

佐藤 麻美 (16)

『スリジエネ』メンバー

大石 央子 (24)

『スリジエネ』メンバー

花井 忍 (17)

『スリジエネ』メンバー

熊木 怜奈 (21)

『スリジエネ』メンバー

河野 美恵 (17)

『スリジエネ』メンバー

長野 優真 (21)

『スリジエネ』メンバー

野倉 昇平 (21)

『スリジエネ』メンバー

野倉 浩司 (29)

『スリジエネ』メンバー

野倉 海司 (18)

『スリジエネ』メンバー

野倉 茜海 (22)

『スリジエネ』メンバー

野倉 美茜 (21)

『スリジエネ』メンバー

野倉 麻美 (16)

『スリジエネ』メンバー

野倉 中央 (24)

『スリジエネ』メンバー

野倉 忍 (17)

『スリジエネ』メンバー

野倉 怜奈 (21)

『スリジエネ』メンバー

野倉 美恵 (17)

『スリジエネ』メンバー

野倉 優真 (21)

『スリジエネ』メンバー

野倉 昇平 (21)

『スリジエネ』メンバー

野倉 浩司 (29)

『スリジエネ』メンバー

野倉 海司 (18)

『スリジエネ』メンバー

野倉 茜海 (22)

『スリジエネ』メンバー

野倉 美茜 (21)

『スリジエネ』メンバー

野倉 麻美 (16)

『スリジエネ』メンバー

野倉 中央 (24)

『スリジエネ』メンバー

野倉 忍 (17)

『スリジエネ』メンバー

野倉 怜奈 (21)

『スリジエネ』メンバー

野倉 美恵 (17)

『スリジエネ』メンバー

野倉 優真 (21)

『スリジエネ』メンバー

1 中央公民館・全景

N 「二週にわたる基礎稽古の末、とうとう今日は台本配布と配役決定の日となりました」

2 同・印刷室

複写機で台本原稿のコピーをしている

山中——製本を手伝っている雅也。

雅也「とうとう今日ですね、配役決定」

山中「基本的には当て書きにしたんだけど、一回読み合わせをしたうえで、正式に決めるように思ってる」

雅也「(台本を見て)彦星に織姫、大学生の青年に女子高生、カササギにその三人の妹、彦星の飼い牛、北極星に住む魔女、魔女の飼い猫と犬、天帝様とそのお付きの女官……十三人プラスはっしーさんですね」

山中「はっしーの役は、もう決まってるんだけどね」

雅也「この中だと、天帝様ですか？」

山中「さすがうっちー」

雅也「僕はどの役になるんだろう……」

山中「気になる？」

雅也「そりゃ、言わばこれが演者デビュー作ですからね。どんな役になるのかなと思つて。もちろん、他のメンバーたちがどういう配役になるのかも、すごく気になりますけど」

と、ドアが開き、直海と茜が入ってくる。

直海「おはようございます」

茜「おはようございます」

山中「おはよう」

雅也「おはよう、ナオ、とみー」

直海「とみーと一緒に、手伝いに来ました」

山中「ありがとう。うちーと一緒に製本手伝つて」

直海・茜「はい」

雅也「今日、配役決めるんだってさ」

直海「え、私何の役だろう」

茜「やっぱり、ナオはメインどころじゃな

い？」

直海「どうかなあ」

茜「男性陣は、どんな役になるかな」

雅也「天帝様は、はっしーさんだって」

茜「だろうね」

雅也「俺は何の役かな。当て書きだって、ヤマさんは仰ってましたけど、この中で当てはまる役って……」

直海「男性陣でしょ。大学生の青年は、これは多分コウタかショウじゃないかな」

雅也「そうだろうね。少なくとも、俺ではない」

茜「彦星か牛じゃない？」

雅也「やっぱり、消去法的にそうなるよね」

山中「今日の稽古で発表するから」

雅也たち「はい」

3 同・会議室

台本を見ながら読み合わせをしている

雅也、山中、浩太、昇平、啓司、直海、

茜、麻美、美央、麗子、忍、怜奈、真
理恵、優美。

N「メンバー揃い、僕たちはまずストーリー
を理解するために、最初から最後まで一通
りの読み合わせを行いました。そして、そ
の後配役が決定しました」

× × ×

山中「ではこれから、配役を発表します。主
人公の大学生、望役。コウタ」

浩太「はいッ」

山中「ヒロインの女子高生、香苗役。ナオ」

直海「はい」

山中「彦星役、マイキー」

啓司「はいッ」

山中「織姫役、ユミ」

優美「はい」

山中「カササギ役、シヨウ」

昇平「はい」

山中「カササギ三姉妹長女コーラ役、レイコ」

麗子「はい」

山中「カササギ三姉妹次女カテイ役、レイナ」

怜奈「はい」

山中「カササギ三姉妹三女ミシヤ役、ミオ」

美央「はい」

山中「彦星の飼い牛役、うっちー」

雅也「はいッ」

山中「天帝様付きの女官役、とみー」

茜「はい」

山中「北極星の魔女役、マリエ」

真理恵「はい」

山中「魔女の飼い犬役、シノブ」

忍「はい」

山中「魔女の飼い猫役、アサミン」

麻美「はい」

山中「『スリジェネ』のキャスティングは以

上です。みんな、自分の役を責任もって演

じるように」

一同「はいッ」

×

×

×

台本を持ちながら演技をしている一同

——メンバーのもとで指導をしている
山中。

N 「それからというもの、僕らはヤマさんの
演技指導と演出のもと、稽古を重ねていき
ました。そして、一ヶ月が経った六月も中
旬に入った頃、夏祭りのパンフレットに掲
載するためのメインビジュアルの写真撮影
が行われました」

4 同・和室（一ヶ月後）

直海、茜、麻美、美央、麗子、忍、怜
奈、真理恵、優美が、佐代子や田所、
その他スタッフたちに浴衣の着付けを
してもらっている。

N 「浴衣での撮影ということで、女性陣のほ
うはボランティアスタッフ総動員で着付け
やメイクを手伝ってもらっていました。一
方、男子チームは……」

5 同・会議室

雅也、浩太、昇平、啓司が浴衣姿にな
っており、それぞれ鏡を見ながら化粧
をしている。

昇平「うっちー、もう少しファンデーション

強めでも良いよ」

雅也「分かった、ありがとう」

昇平「ちゃんと乳液と化粧水塗った？」

雅也「もちろん。一週間前から、風呂上がり
に毎日塗ってきた」

啓司「徹底してるね、うっちー」

雅也「当たり前じゃん」

と、山中、本村、橋崎が入ってくる。

山中「お、良い感じじゃんか」

本村「やっぱり浴衣は、夏って感じがして良い

ね」

雅也「久しぶりに着ましたよ」

橋崎「帯、ちゃんとできた？」

雅也「着付けの仕方は調べました」

浩太「うっちー、眉毛整えたら？」

雅也「え、眉毛？」

と、鏡を見ながら慣れない手つきでハサミで眉毛を切ろうとする。

浩太「（見かねて）貸してごらん」

雅也「全カットはやめてよ」

浩太「そんなことしないよ」

と、ハサミで雅也の眉毛を切り始める

——時折、ハサミで切る手を止めながら状態を見る。

浩太「よし、オッケー」

雅也「（鏡を見て）お、すごい」

6 中央交流センター・ホール（夜）

佐代子、田所、山中、本村、橋崎、カメラマン、浴衣姿の雅也、浩太、昇平、啓司、直海、茜、麻美、美央、麗子、忍、怜奈、真理恵、優美が入ってくる
——セッティングを始めるカメラマン。

雅也「ここが、本番の会場になるんだ」

真理恵「私、声届くかな」

直海「ここ、変に反響するみたいなんだよね」

麗子「演劇向きではないって聞いたことある

けど」

忍「下手がないってことは、この階段で移動

しなきゃいけないわけだ」

麻美「はけるとき、大変だね」

美央「確かに」

怜奈「（観客席を見て）大体二百人ぐらいか」

優美「そうだね。公共施設のホールってなる

と、そんなもんじゃない」

雅也「二百人か……」

× × ×

ステージの上で上下二列に並ぶ一同――

下段真ん中に直海と美央、直海の左

隣に優美と茜、美央の右隣に怜奈と麗

子。上段真ん中に真理恵、その両側に

麻美と忍、麻美の左隣に雅也と昇平、

忍の右隣に啓司と浩太。

カメラマンがシャッターを押す。

× × ×

メンバーの集合写真。

× × ×

撮影終了後。

昇平のスマホで自撮りをするメンバー
たち——カメラに映るように密着して
集まる。

× × ×

メンバーの集合写真（自撮り）。

7 カラオケ・全景（夕）

N 「メインビジュアルの撮影からしばらく経
ったある日、ヤマさんの要望で平日の夜に、
該当者だけの個人稽古をすることになりま
した。配役が決まってすぐの時、コウタと
共に個人稽古をしましたが、今回はそれ以
外にナオ、とみー、ミオの三人とヤマさん
を含めた六人で、カラオケの一室を借りて
行うことになりました」

8 同・一室

ジュースを飲みながら話している雅也

と山中。

山中「そっか。役に対する不安があるのか」
雅也「配役も決まって、ある程度役が定まってきたから、余計にそれを考えるようになってきたんです。本当に自分が、牛役で良かったんだろうかって。役作りも、いろいろ考えたんですよ。YouTubeで、牧草地で鳴いてる牛の動画を見たり、草をひたすら食べてる牛の動画見たりして。ただそれでも、牛の役ってどうやるんだろうって悩んだりもして」

山中「なるほどなあ。配役っていうのは、いろいろパターンがあって、正解がないんだよ。演技一つだって、全く同じ演技をするのってなかなか難しいんだ。配役の前に読み合わせやっただろ？ あの時も、結構悩んだんだ。うちーを牛にすべきか、彦星にすべきかって」

雅也「そうだったんですか」

山中「けど、考えてもみな。じゃあ逆に、う

つちーがコウタのやってる望役や、シヨウ
がやってるカササギ役ができると思うか？」

雅也「とんでもない。あの役は、とてもじゃ
ないですけど僕には……」

山中「そういうことだよ」

雅也「は？」

山中「その人にしかできない役っていうのが
あるんだよ。演劇っていうのは」

雅也「……」

山中「同じ作品をWキャストで演じることが、
舞台やミュージカルではよくあることだ。

あれだって、同じキャラクターだけど演じ
る俳優が違うと、やっぱり違う演技になる
んだよ。それはつまり、演じる俳優が本来
持つてる個性や味を出してると思うんだよ。
ドラマだって、何でこのキャストイングな
んだ？って思う作品もあるだろ。あれは事
務所絡みもあるんだろうけど、ミスキャス
トになってる作品もある。逆に、これは良
い配役だって作品もある。キャストイング

っていうのは、そういうバランスもあるんだよ。だから今回の作品だって、うっちーだから演じれる役があると思ってる。それが、読み合わせをしたうえで、牛だと思っただよ。コミカルだけど、クライマックスでは突進していくような情熱を持った牛を演じれるのは、『スリジェネ』の男性メンバーの中では、うっちーしかない、俺はそう思ってる」

雅也「……」

山中「最初の稽古ではどうなるかなって、ちよつと不安だった。声は小さいし、他の人がセリフを言ってる間にそろそろ自分のセリフが来るって待ってる顔になってるし、セリフを間違えると自分で止めちゃうし。でも、この一ヶ月でうっちーはちゃんと成長してると思うぞ。牛という自分の役に向き合ってる。もっと自信もって良いんだぞ」

雅也「……」

と、ドアが開き、浩太、茜、直海、美

央が入ってくる。

浩太・茜・直海・美央「お疲れ様です」

山中「おお、お疲れ」

雅也「お疲れ」

山中「さて、全員揃ったし、個人稽古始めますか」

一同「はいッ」

× × ×

稽古をしている雅也、浩太、茜、直海、

美央——演技指導をしている山中。

N「メンバーたちが合流し、そこから二時間ほど、個人稽古を行いました」

9 回転寿司店（夜）

寿司を食べながら談笑している雅也、

浩太、茜、直海、美央。

美央「何だか早いよね、もう稽古始まって一ヶ月だよ」

浩太「あつという間だよな」

雅也「はあ……不安になってくるわ」

浩太「どうして？」

雅也「だって、あと二ヶ月もしないうちに本番でしょ。どうなるのかなと思って、気が
気じゃないよ」

直海「そうかな？」

雅也「え？」

直海「うちー、結構頑張ってると思うよ。
まあ声のボリュームは、初めてだからしょうがないけど、初めてにしては演技がすごく自然な感じがして良いと思うよ」

雅也「いやあ、ナオに言われると嬉しいね」

茜「私もそう思うよ。まあ、私はセリフが少ないから偉そうなことは言えないけど、特にうちーとコウタが初めて対面する場面なんて、二人の掛け合いが面白いもん」

浩太「そりゃ、二人の個人稽古やったもんな」

雅也「確かに、あの稽古の時間は大きかった
ね」

直海「だから、うちーはもっと自信もって
良いと思うよ」

雅也「俺、演技もダンスも歌も未経験でしょ。恥ずかしい話、上手とか下手っていう演劇の用語すら知らないレベルの人間だから、とにかくみんなの足を引っ張らないようにって、それだけを気にしてやってる」

直海「舞台初めてとは思えないよ。他のメンバーより実力あるんじゃない」

雅也「え？」

美央「やっぱり、脚本書いてるからじゃない。自分で書いてると、読解力とかイメージもつきやすいんだと思うよ」

浩太「ああ、それはあるかもしれないぞ、うちー」

雅也「なるほどねえ」

直海「だって、そこまでって人もいるじゃん、中には」

雅也「え？」

直海「マイキー、東京の養成所に行ってたつて言うけど、私から言わせてみれば、それほど大したことないと思ってる。意外と下

手」

浩太「俺もそう思う」

雅也「あら、みんな随分手厳しいのね」

直海「だって、セリフはよく噛むし間違えるし、忘れるし、そこまで演技力もないし。比べるわけじゃないけど、うちーのほうが上手いよ」

雅也「そうかなあ……。まあ、初心者だからひたすら緊張感持ってるだけだと思う。マイキーは、養成所での経験があるから場馴れしてるんじゃないかな」

直海「その場馴れが怖いんだよ。こんなものかって甘く見てると、後から作品のクオリティに影響するんだから」

美央「さすがナオだね、説得力が違う」

茜「確かに」

直海「あ、ごめん。私、どうも演技の話になると変なスイッチ入っちゃって」

浩太「経験者からしたら、その温度差もあるんじゃないかな」

雅也「そりやみんな上手いもん。オーディションの時、俺、ナオとショウとレイナと一緒にだったんだよ。みんな演劇とか詩吟やってる人でさ、一人ド素人が混ざってて、とんだ公開処刑だったんだから」

直海「ああ、そういえばうちーオーディション一緒だったね」

雅也「運営だからさ、あらかじめ誰かが何日のオーディションに来るのか分かってたでしよ。だから、よりにもよって俺がオーディション参加する日に、経験者三人が来ちゃったから、勘弁してくれよって思ったもん」

直海「あの頃と比べたら、別人みたいだようちーは」

雅也「恐縮です（と笑う）」

浩太「縁あって一緒に舞台に立つんだ。俺だって、映像経験はあったけど、舞台は初めてだから結構苦戦してるんだぞ」

茜「私も。まあ普段は音楽だし、映像は一回

国枝さんの市民映画で挑戦したことはあるけど」

浩太「え、とみーも出てたの？」

茜「うん。だからコウタとアサミンが出てたのは、私も知ってた」

浩太「どこのシーンにいた？」

茜「えっとね、教室のシーンでテストの返却をするっていう場面があって、その生徒役の一人でいた」

浩太「え！？あのシーン、じゃあ一緒だったってこと」

雅也「コウタ、知らなかったの？とみーが

同じシーンにいたこと」

浩太「あの時は、とみーと接点なかったから全然気づかなかった」

直海「ああ」

美央「前に一緒に共演してたのに」

浩太「ごめんなさい」

茜「良いの良いの、あの時は他に生徒役の人いたんだもの、気づかないって」

浩太「アサミンにも話しとこ。あ、家帰った
ら映像チェックしてみよう」

茜「やめて」

10 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がパソコンで作業をしている。

N 「帰宅後、僕は本来の仕事の対応をしてい
ました。本業は舞台に立つことではなく、
脚本制作とフリーペーパーを作ること。そ
のまま朝方まで、僕は自室で仕事をしてい
ました」

つづく